アニメで知る心の世界

こもれび心の診療所　羅田　享

今回扱うアニメ作品： 君に届け　9回目

今回のテーマ

恋愛について考える

Ⅰ．恋愛は転移からはじまる

Ⅱ．恋愛は人との距離を縮めること

Ⅲ．恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

Ⅰ．恋愛は転移からはじまる

転移とは？　出会いは転移から

精神分析の創始者であるフロイト（Freud,S）がクライエントの治療を通して発見した現象で、過去の重要な対人関係で形成された感情、態度、期待、行動パターンを、現在の対人関係に無意識的に転写すること。

転移は人間の心理として自然な現象である。日常生活のあらゆる対人関係において、程度の差こそあれ転移は生じている。

恋愛は一般的に転移からお互いに惹かれ合うことから始まっていく。「君に届け」も同様に、主人公の爽子と風早くん2人の出会いの間に転移が生じ惹かれ合っていったのだと

考えられる。転移とは過去に自身が経験し、感じてきたことの投影であり、現実のものではない。そこにハマり、人は変われど、同じような人をを好きになること多い（反復強迫)。そこから脱却するには、相手自身を知ろうとすることである。それには相手との距離を縮めていくことに他ならない。

Ⅱ．恋愛は人との距離を縮めること

恋愛関係になるということは、物理的にも心理的にも相手との距離が非常に近くなることだと感じる。しかし相手を知ろうとする都度、新たな真実にぶつかり、戸惑い心が揺さぶられる。それは自分自身の今まで見過ごしてきた感情に気が付くことでもある。

風早くんと二人きりになった時に、爽子は今までに感じたことのない感情（異性と触れ合う嬉しい感情）を抱くが、一方で本当に自分が受け入れてもらえるか怖さも感じたと思う。その中でクラスメイトから二人の関係を冷やかされ、爽子は傷つき風早くんから距離を取ろうとする。それは彼女自身が今までとってきた、心の防衛機制である。そこに風早君が気づき彼女に手を差し伸べ関係が保たれ、徐々に2人の距離が近づくということを繰り返している。

そしてその2人に関係性の揺れ動きの中で、爽子は風早君の揺るがない愛を感じ、より自身の感情を深く知り、これまでの殻を破り現実に触れていこうとする。

「君に届け」というタイトルが示唆するように、物語は爽子が風早くんとの心理的距離を縮め、彼と対等になっていく過程を描いている。しかし爽子が風早くんと対等に付き合うには、自身が理想化した風早くん像を壊し、実際の風早くんの存在を受け止めていく必要がある。それは思春期に再び訪れるエディプス葛藤に向き合い、乗り越えるという意味でもある。

エディプス葛藤に向き合うには自身の様々な感情に気がつき、受け入れていく作業でもある。

「君に届け」における思春期の葛藤と成長

この年代の若者は、主体性の形成の過程で、自己中心的視点から世界を解釈し、自分の

外見に過剰な意識を向け、常に他者からの評価を気にする傾向がある。

　爽子もこの思春期的混乱の中で揺れ動いている。周囲を迫害的に捉える一方、親しくなった相手（あやねや千鶴達）を「夢のよう」と理想化する両極端な認識を示す。しかし瑣末な出来事から自己否定感が強まると他者との距離を取ろうとする動きをするが、風早くんという存在が爽子の内的な「良い対象」として、彼女の心の支えとなることで、なんとか殻に閉じこもることから踏みとどまらせている。

　それが席替えのテーマや爽子が風早君と距離が近いゆえに周りから晒される羨望から生じた噂に爽子は翻弄される。

　噂話とは？吉田が元ヤンで少年院に入っていた、矢野が色んな技で百人斬りしていると貞子が吹聴しているというもの

　噂に翻弄されるなかで、爽子は迫害的になり、再び殻に閉じこもろうとし、風早くんやあやねや千鶴達との関係もギクシャクしていく。

　その異変に気づいた風早くんは爽子に再び手を差し伸べ、「俺は……俺のしたい様にするよ　…噂なんてどーだっていい。　俺にとっては俺を見てる黒沼だけが黒沼だ！！」と言って爽子を鼓舞する。

　その言葉に鼓舞された爽子は現実に向き合おうという意志を強め、噂に対峙していく。

噂との対峙

　ありもしない噂をする大勢の子（A 組の女子達）たちと爽子が対峙するが、そのなかで、一度は疑った友情を再び取り戻し、その感情をより強固なものとし、他者との関係を深めるきっかけを作り出していったと考えられる。

　一方でそこで明らかになったのは、多くの女の子たちは皆、風早君のことが好きで、常に彼の近くにいる爽子に対して嫉妬や羨望の思いである。また彼女らの嫉妬や羨望は爽子の投影であり、それを受け入れられない爽子がいる。それであるが故に依然、風早君を完全無欠のヒーローだと捉えており、対等になれていない。そこで向き合うこと、それはエ

ディプスコンプレックスに対峙することである。

そして胡桃沢　梅という男子生徒からの憧れの的の女の子、完全無欠のヒロインと対峙していくことであり、まさにそれが、エディプス葛藤への対峙なのである。

Ⅲ．恋愛はエディプス葛藤にむきあうこと

風早くんをはじめとした仲間たちと仲良くなっては、色々な噂に翻弄され、迫害的な心理状態になる爽子だが、風早くんに支えられながら彼らとの関係性は次第に深まり、友情はより強固になっていく。

そこで、憧れの風早くんと付き合うようになるまでには、もうひと段階、風早くんとの距離を縮め、彼と対等の関係性を築いていくことが必要である。爽子自身が手の届かない存在（親）と感じてきた対象と対等になっていくということは、エディプス葛藤に向き合うことでもある。しかしそれに向き合うということは、ある意味いままでの生き方を根底から覆すパンドラの箱を開けるようなものなのである。

１．エディプス葛藤とは

エディプス期（～6歳）**父・母・自分の三者の葛藤**：社会性の芽生え

ギリシャ悲劇のエディプス王（父を殺し母と結婚する話）から着想

子どもは異性の親に結ばれたい願望があるが、一方で敵わないとも感じる。

社会性（自分でも母でもない第三者の出現）の獲得と未熟さへの葛藤

→父・母の関係性には叶わないと感じている一方で対等な関係を形成したいと考え、葛藤する心性。

ここで、風早くんを父、くるみちゃんを母と見立て、その中に入っていきたいという願望を爽子は感じており、エディプス葛藤が生じている。

そこでくるみちゃんに対して羨ましい思いを抱く一方で、風早くんに対しても彼の一挙手一投足がこれまで以上に気になり、風早くんの顔を見るだけでも胸が痛いと感じるようになり、憧れから恋愛の対象にシフトするようになっている。

そしてくるみちゃんも風早くんと爽子が話している中に、割って入っていこうとして、くるみちゃんと爽子の距離も近づいていく。そこで、風早くん、くるみちゃん、爽子の三

角関係を巡る葛藤が描かれていく。（episode 10.）それはまさにエディプスコンプレックスの始まりである。

2. くるみちゃんとの対峙　エディプス葛藤に向き合うということ

爽子は風早くんを意識し始める中で、彼との関係性がギクシャクしてしまい、一方で風早くんとくるみちゃんの関わりが自然であると感じ、くるみちゃんのことを「カワイイ上にいい人な上にフレンドリー…」と理想化している。しかしその裏には、くるみちゃんに対する強い羨望があるように感じられる。

また、くるみちゃんが爽子に敵意をあらわにするなかで、くるみちゃんが風早くんに恋愛感情を抱いていることを考えた時、爽子自身が風早くんに恋愛感情を抱いていることを知る。

その後、風早くんと爽子の仲を引き剥がそうとする、くるみちゃんの（ある意味、悪意ある）策略が白日の元に晒され、爽子がそのことを知り、そこでのくるみちゃんとの対話を前回扱った。

爽子とくるみちゃんの対立シーンの考察

このエピソードでは、風早くんを巡る葛藤からくるみちゃんの「化けの皮が剥がれた」形になっている。くるみちゃんはあざとく、醜態をさらけ出し、ある種私利私欲の様を見せている。けれども、それによって彼女が手の届かないところにいる完全無欠なヒロインではなく、一人の俗世に塗れた平凡な人間であることが鮮明に描かれている。そんなくるみちゃんの姿を見た爽子は、彼女が自分と同様にコンプレックスを抱え、それゆえに狡猾な手段を使ってしまう一人の弱い人間だということを受け入れようとしている。

一般的な作品では、あざとく醜態をさらけ出したライバルに主人公は失望し、そのライバルは排除されフェードアウトしていく印象があるが、この作品では異なっている。爽子は風早くんに対するくるみちゃんの一途な思いに共感し、寄り添っている。くるみちゃんが爽子に激しい陰性感情をぶつけても、それを受け止め、「…私…最初のくるみちゃんよ

りも 今のくるみちゃんの方がもっともっと可愛いと思う……」と伝えている。

確かにこのシーンでくるみちゃんは馬脚を露わにした形になったが、それと同時に自身の素直な思いを口にしており、主体的でイキイキとさえしている。くるみちゃんの攻撃性に翻弄されず、彼女の良さを理解する爽子の姿からは、心の成熟を強く感じる。

そして最後の爽子の言葉が印象的である。「くるみちゃんを うらやましかったのは（略）きっと 風早くんに対するくるみちゃんを 可愛いと思ったから」

この言葉と爽子の姿を通して、彼女が一人の成熟し魅力的な女性へと変化していることが鮮やかに描き出されているように感じられる。

２）くるみちゃんが爽子に突き動かされて、主体的に行動するまで

爽子がくるみちゃんに真摯に向き合い接することが、くるみちゃんの心を揺さぶる。これまで受身的で噂や流したり、そそのかしたりして人を動かすパッシブアグレッシブ（受動的攻撃行動）的な行動をとってきたが、ふと中学時代のエピソードを思い出す。

（episode17）くるみちゃんは中学時代、女の子たちからも慕われていただけでなく、顔立ちがよく可愛いために、男の子からちやほやされることが多かった。しかし女の子達からはそれを利用していただけにすぎないこと「くるみがすきな人できたら邪魔しちゃおーよ」と言っていたことを聞き、より自分の思いを話さなくなったこと思い出す。

（受動的攻撃的コミュニケーションの根底にあるのは、直接的な衝突に対する恐怖心・回避したい気持ち、無力感、不安である）

そして風早くんと出会った時にくるみちゃんは意を決して自分の思いを伝える。

くるみちゃん：…風早…爽子ちゃんってどんな子？

風早くん：黒沼は誤解されやすいけど…なんだかんだリスクしょいながら本当のことを言うから　だから俺　黒沼が「こうだ」って言ったら「そうなんだ」って思う。

くるみちゃん：…リスク？

風早くん：黒沼は思ってないだろーけど　何言っても絶対安全な場所にいる奴だったら

吉田や矢野も黒沼のこと信じきれなかったかもしんないもん

力になりたいなと思っても　結局自分で頑張っちゃうからなぁ黒沼は……頑張ったなぁって思う　…て　うわー何言ってんだ俺　すげーえらそう！！　んじゃ

（中略）

くるみちゃん：待って…風早！　わたし…ピンのことなんか好きじゃない

わたしが好きなのは…風早くんだよ　ずっと見てきたのは風早だもん！！

風早だもん……他の人を…好きだなんて　風早が思わないで…

風早くん：ごめん！！　胡桃沢！ごめん！！　好きな子がいるんだ　他の子のこと　その子以上に想えないんだ　ごめんな

くるみちゃん：…知ってるよ　バレバレだもん　風早

風早くん：え！？（汗）

くるみちゃん：…わたしに告白されて…ちょっとでも嬉しい？

風早くん：うん　ありがとな！

くるみちゃん：…1回だけ…わたしの名前呼んで…下の名前

風早くん：梅！

くるみちゃん：…あーあ！！　このばばくさい名前もそんな悪くないっか！！も～言うつもりなんかなかったのに！計算狂いまくり！…一番計算を狂わせたのは…風早だったけど…**もう　二度と　こんな可愛い子目の前に現れないんだからね！！**

（中略）

風早くん：胡桃沢　そんな性格だったっけ？　（このあとくるみちゃんはスッキリした表情をみせる）（**爽子**：...私...最初のくるみちゃんよりも　今のくるみちゃんの方がもっともっと可愛いと思う.....というセリフを彷彿とさせる）

くるみちゃん：風早　女見る目ないもんね！　ばいばい

【考察】

　くるみちゃんが風早くんに爽子の評価を尋ねたときに「リスクを背負いながら本当のことを言う」と言う様に風早は爽子が何事も真摯に向き合い、だからこそなんとかしたいと

思い、惹きつけられると言っている様に感じられる。それはこれまでのくるみちゃんとは真逆である。そしてくるみちゃんは爽子に真摯に思いを受け止め、心揺さぶられたのちに風早くんが放った言葉は彼女を受身的な態度から主体的にアクションを起こす様に突き動かした様に感じられる。そしてくるみちゃんは意を決して告白する。

　その思いは叶わなかったが、しかし主体的に行動できたことで、彼女はさっぱりとした表情をし、「女見る目ないもんね！」と言い切る。それはある意味負け惜しみではあるが、可愛い子ぶって男に媚びる過去の自分から脱却できた清々しさでもある様に感じられる。だからこそ自分の名前が「梅」と呼ばれることを「そんな悪くないっか！！」と言える様になったと考えられる。

　前シーンで爽子は**「私…最初のくるみちゃんよりも　今のくるみちゃんの方がもっともっと可愛いと思う」**と言ったが、まさに主体的に生きる姿の美しさがでている様に感じられる。(「君の名は」で「あの日、星が降った日。それはまるで、夢の景色のように、ただひたすらに美しい眺めだった。」と瀧と三葉が語ったシーンを彷彿とさせる)

３）ライバルとしてのくるみちゃん

翌日、くるみちゃんは泣き腫らした顔を隠すためにサングラス姿で登校する。その姿で爽子と対峙するシーン

爽子：…くるみちゃん…

くるみちゃん：…わたしだって……すきになった時は…嬉しかったよ……人が…風早をほめても話にのらないで　どんなにすきかも誰にも言わないで　自分だけで　……一人で…しまってきたけど
…わたし　爽子ちゃんが万がいち億がいち風早とうまくいっても絶対に「よかったね」とか言わないからね！！風早がすきになる女なんて大っきらいだもん！

爽子：ともだちには……なれないんだよね？

くるみちゃん：…ライバルでしょ！　あ〜〜っ　もぉ　超くやしーーーっ！！なんで負けるのお！！超！超くやしい！！

【考察】

くるみが憧れの存在ではなく、爽子にとって対等な存在と感じ初めているだけではなく、くるみちゃん自身も爽子に対して猫被った感じではなく、色々な感情をむき出しにぶつけてきている。爽子の存在を自分と同じ対等な存在と認めたのだと考えられる。

このとき爽子はくるみちゃんというエディプス葛藤の対象に対峙し、一人の魅力的な女性になっている。それは「君の名は」で三葉が初めて父親と対峙したときの様に魅力的である。そして風早君を憧れの対象ではなく、対等な恋愛対象と捉え始めている。ここで爽子と風早くんとの関係性をめぐるストーリーは SEASON1では終わっているが、早晩彼女ら二人は付き合うことになるだろう。そう確信させる終わり方であったと思われる。

このようにこのアニメは風早くんという今後恋愛対象になるであろう人物との出会いを通じて主人公である爽子の心の成長とともに二人の恋模様が描かれている。だからこそこの年代の人々は爽子に同一化し、この作品に非常に惹きつけられたのではないか？と考えられる。